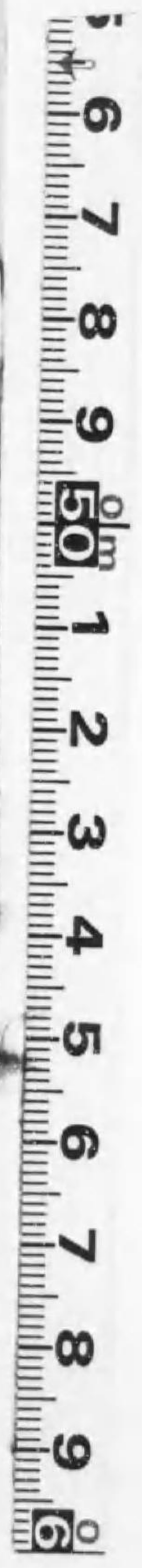


信貴山名勝枝

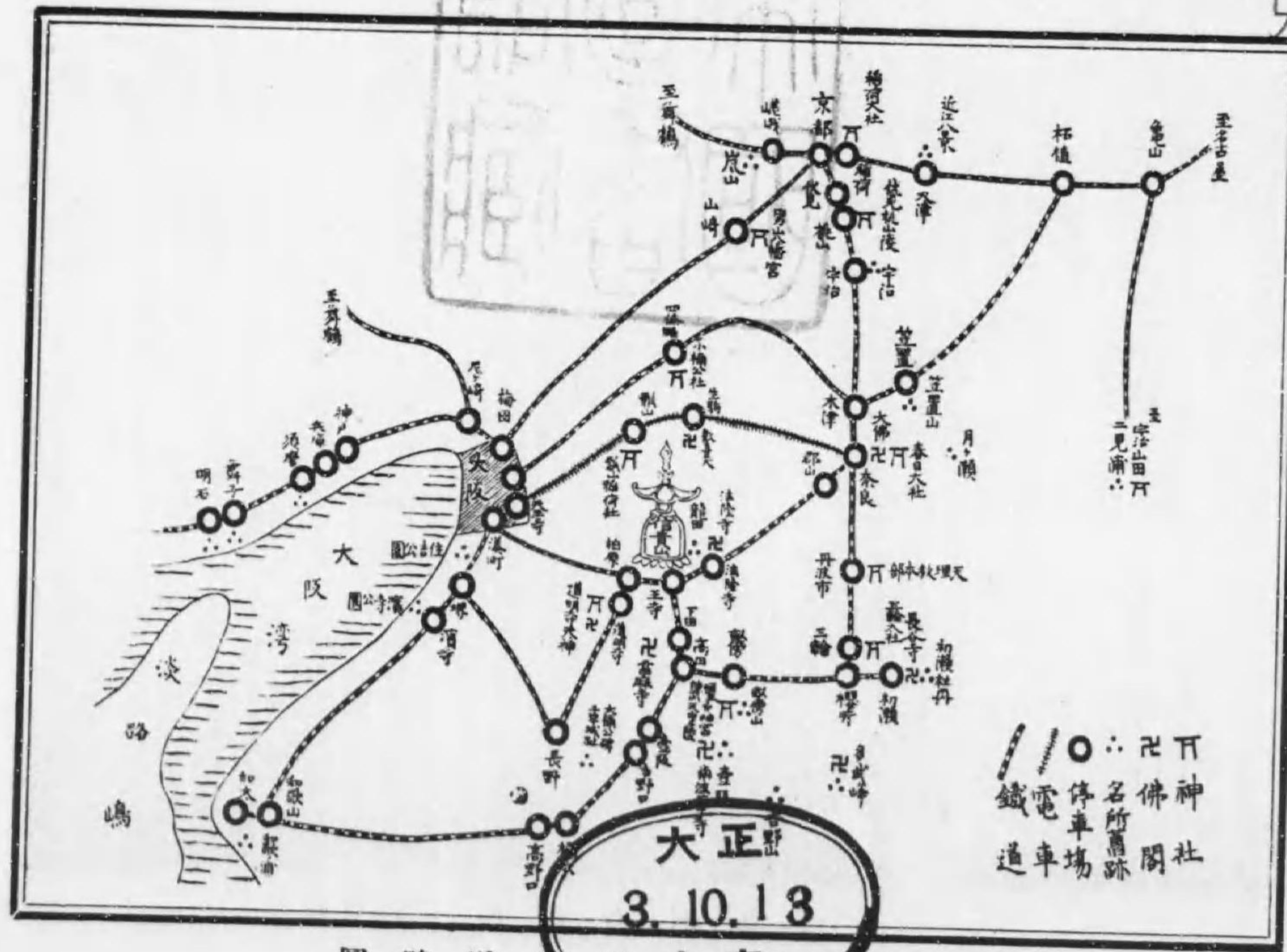
特104
589



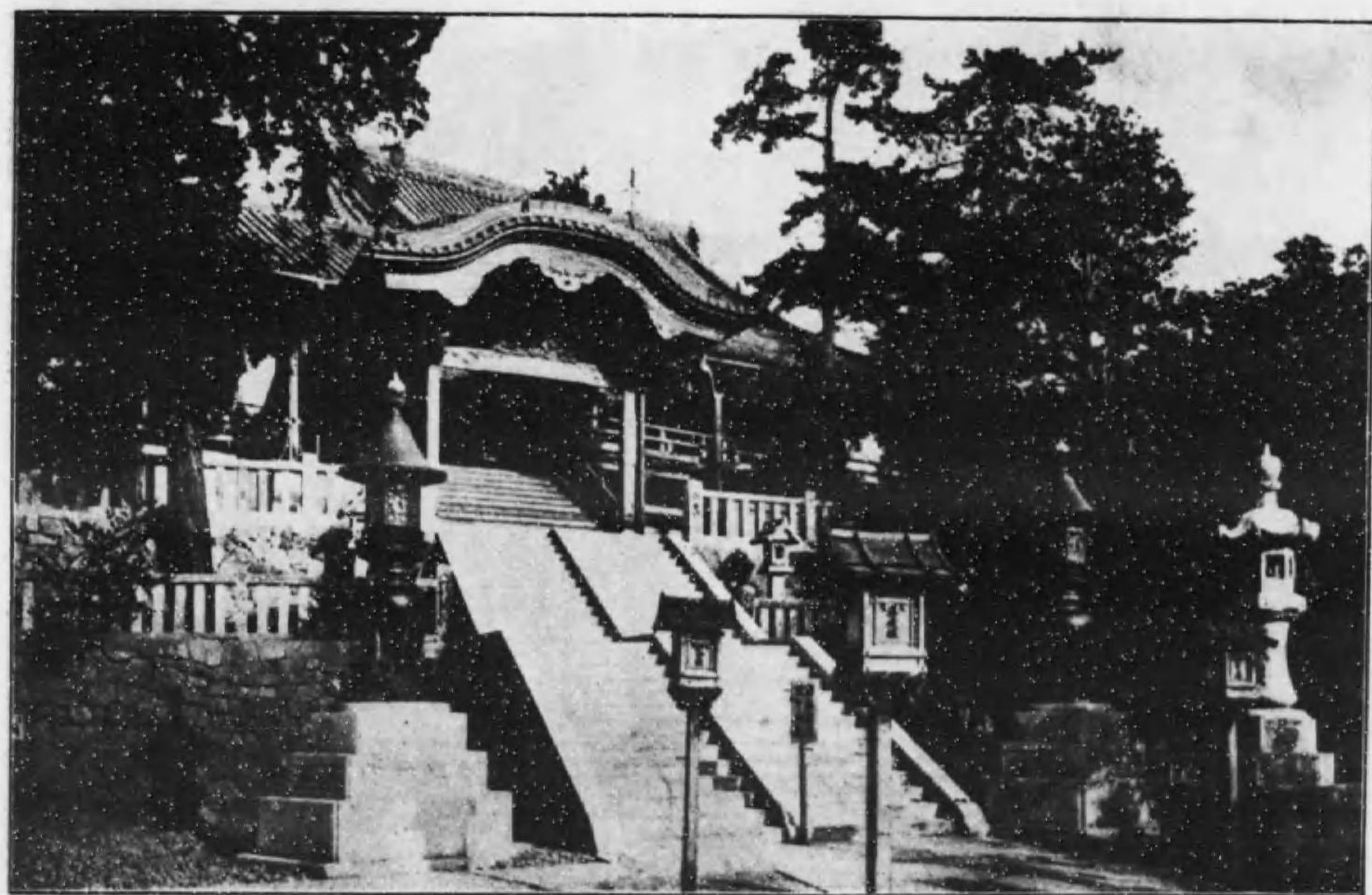
始



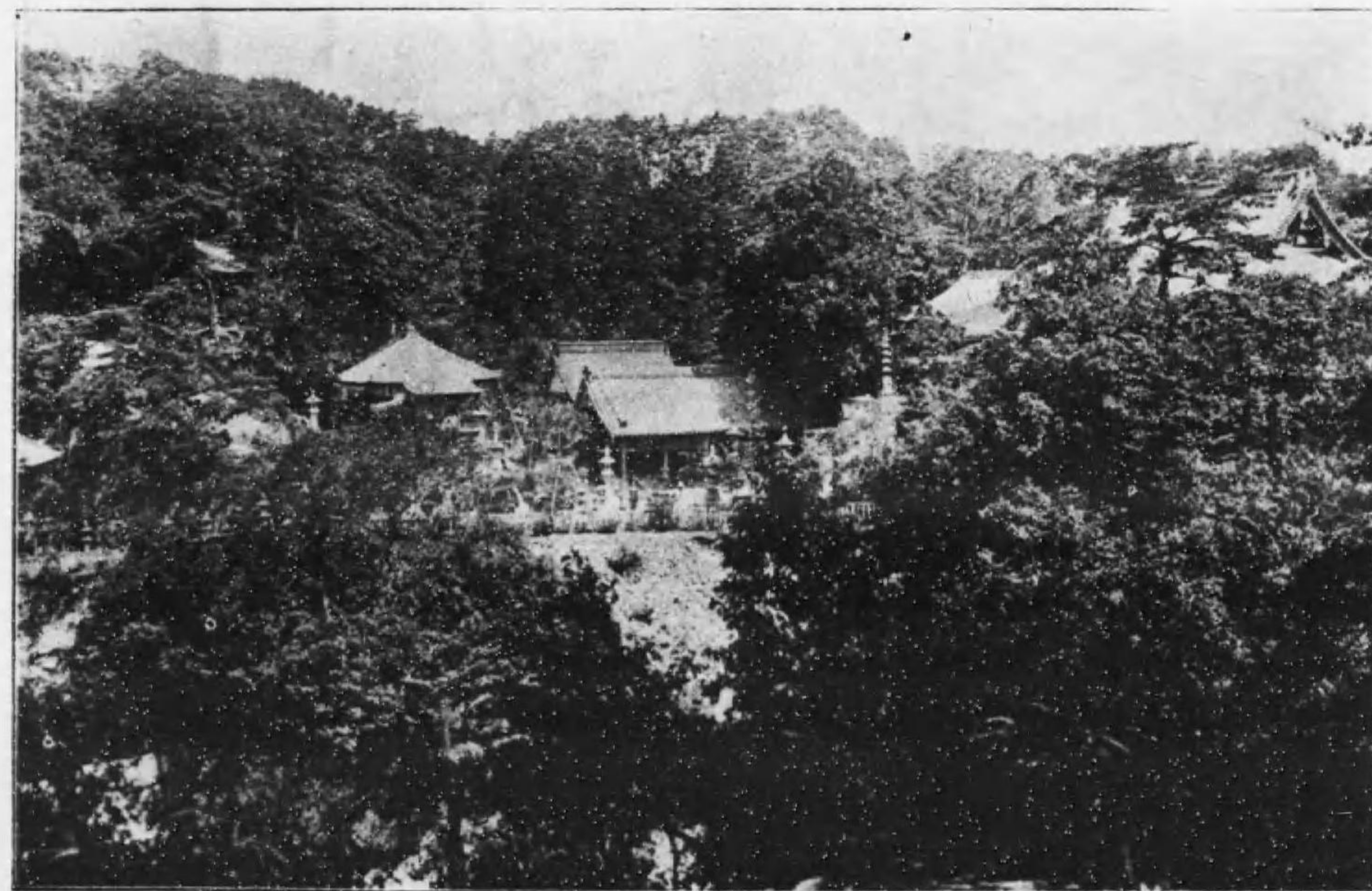
特 109
589



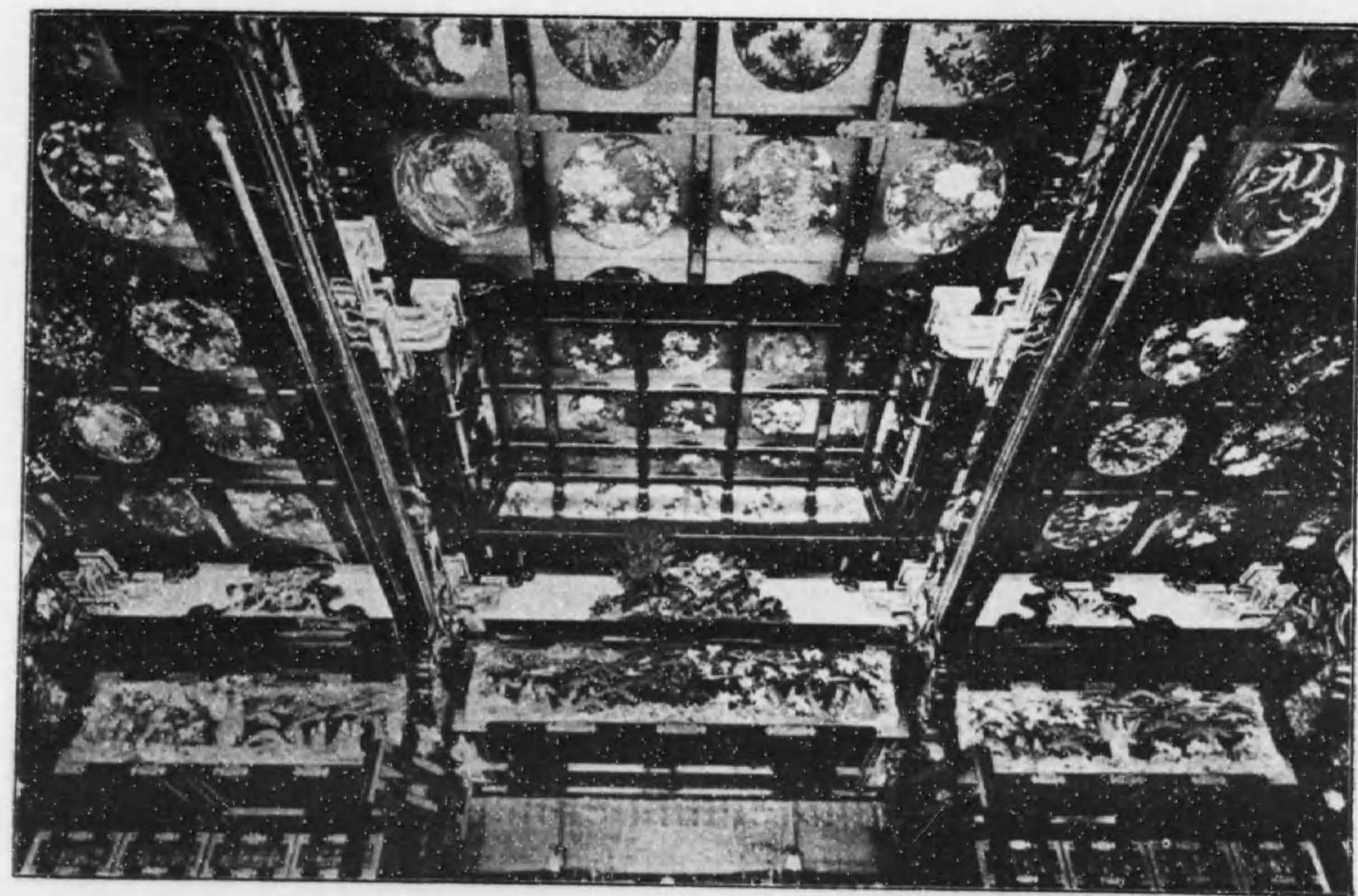
大和信山交内傍鉄道略圖



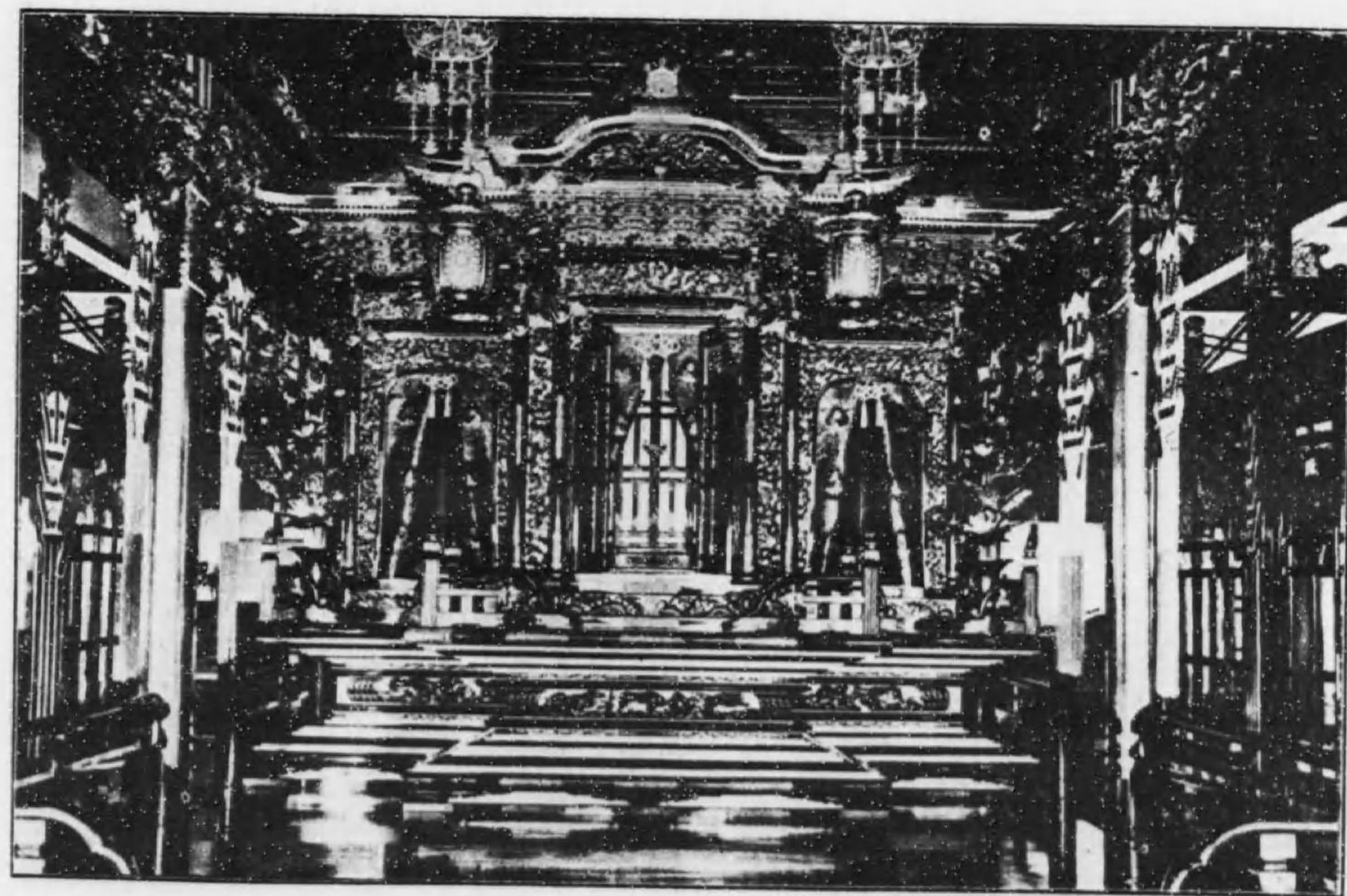
景全拜向堂本 (山貴信和大)



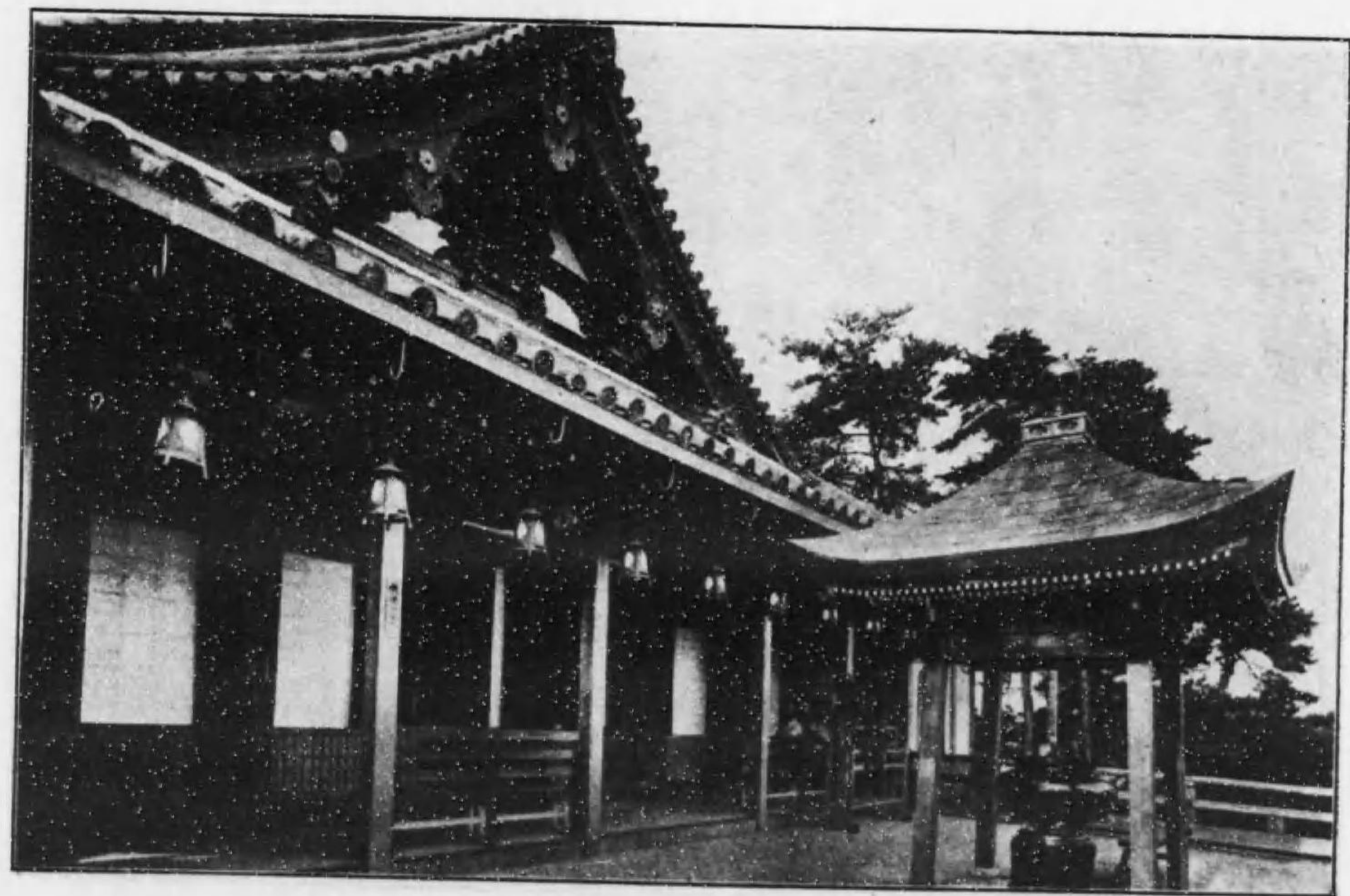
景全面南内境 (山貴信和大)



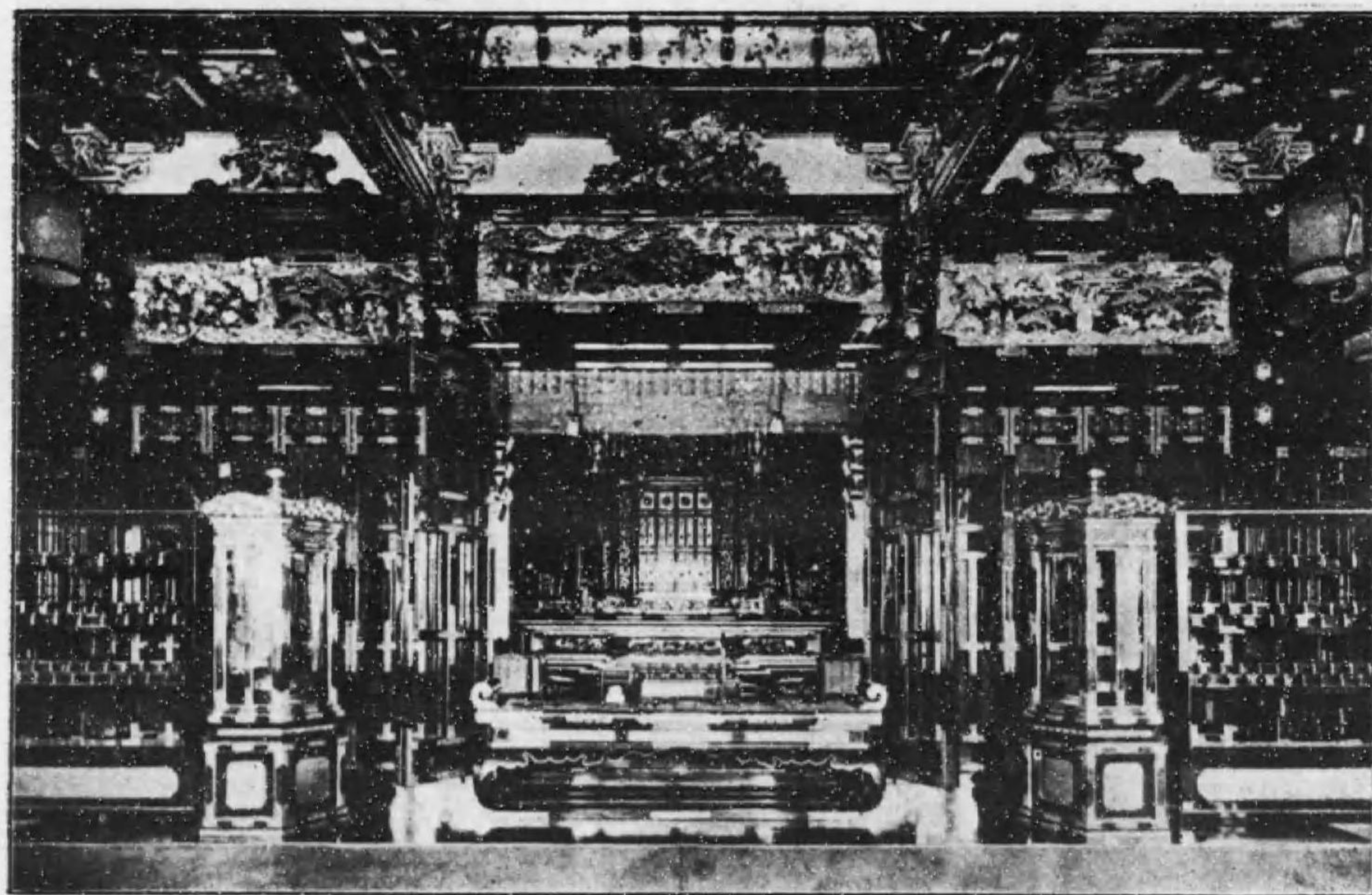
井天碁陣外堂本 (山貴信和大)



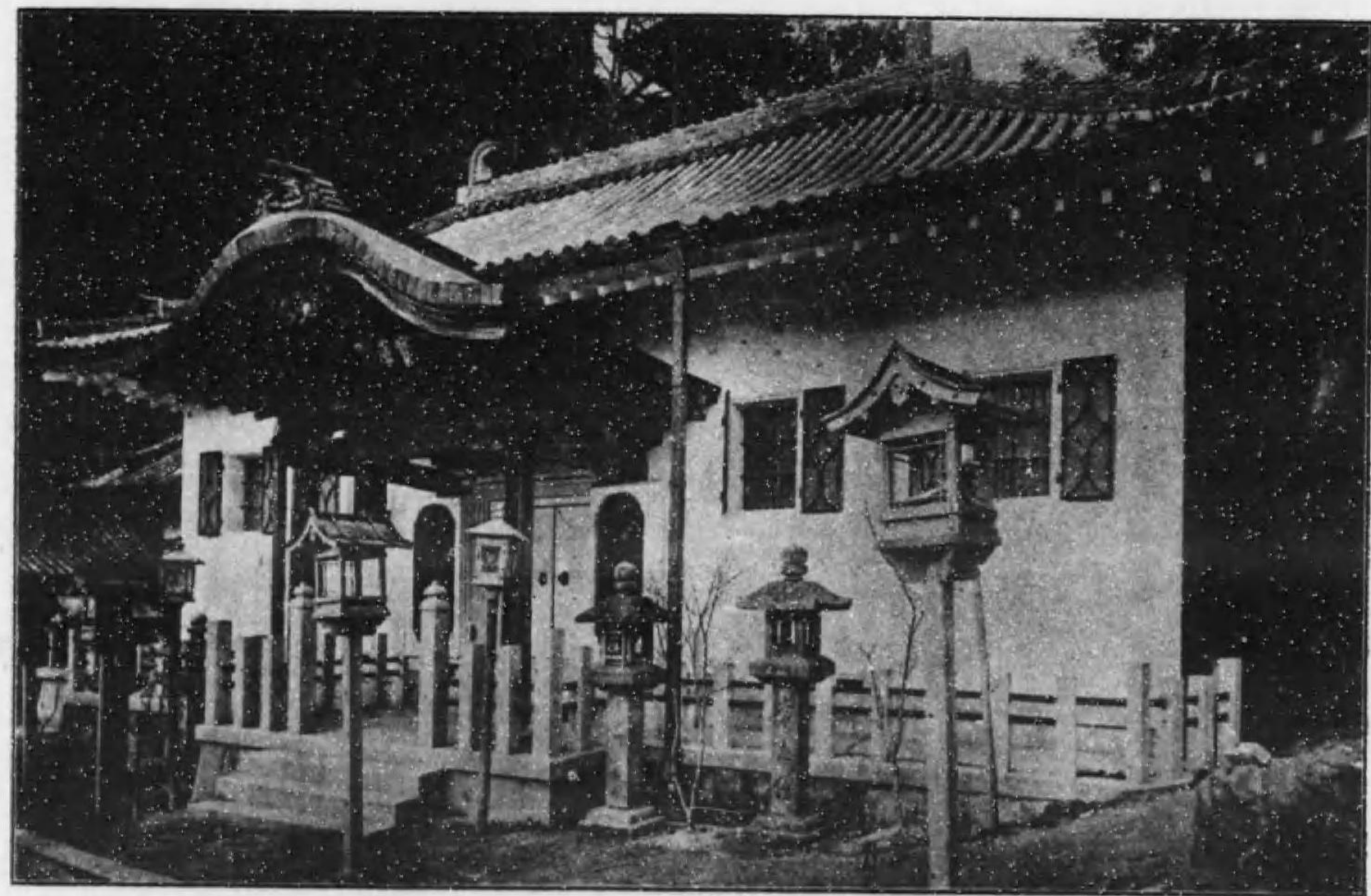
前寶陣內堂本 (山貴信和大)



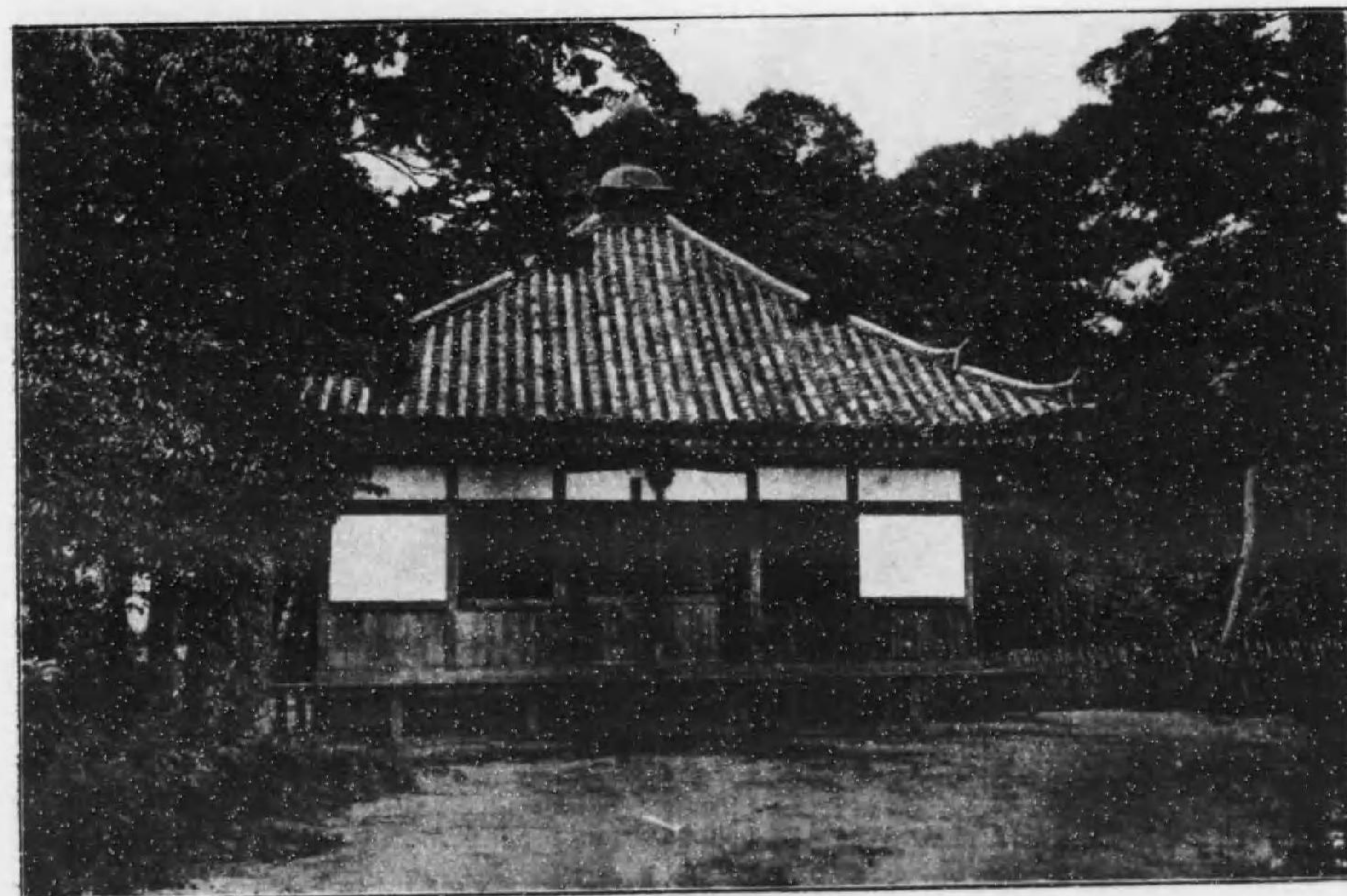
臺舞及下廊面正堂本 (山貴信和大)



面正陣外堂本 (山貴信和大)

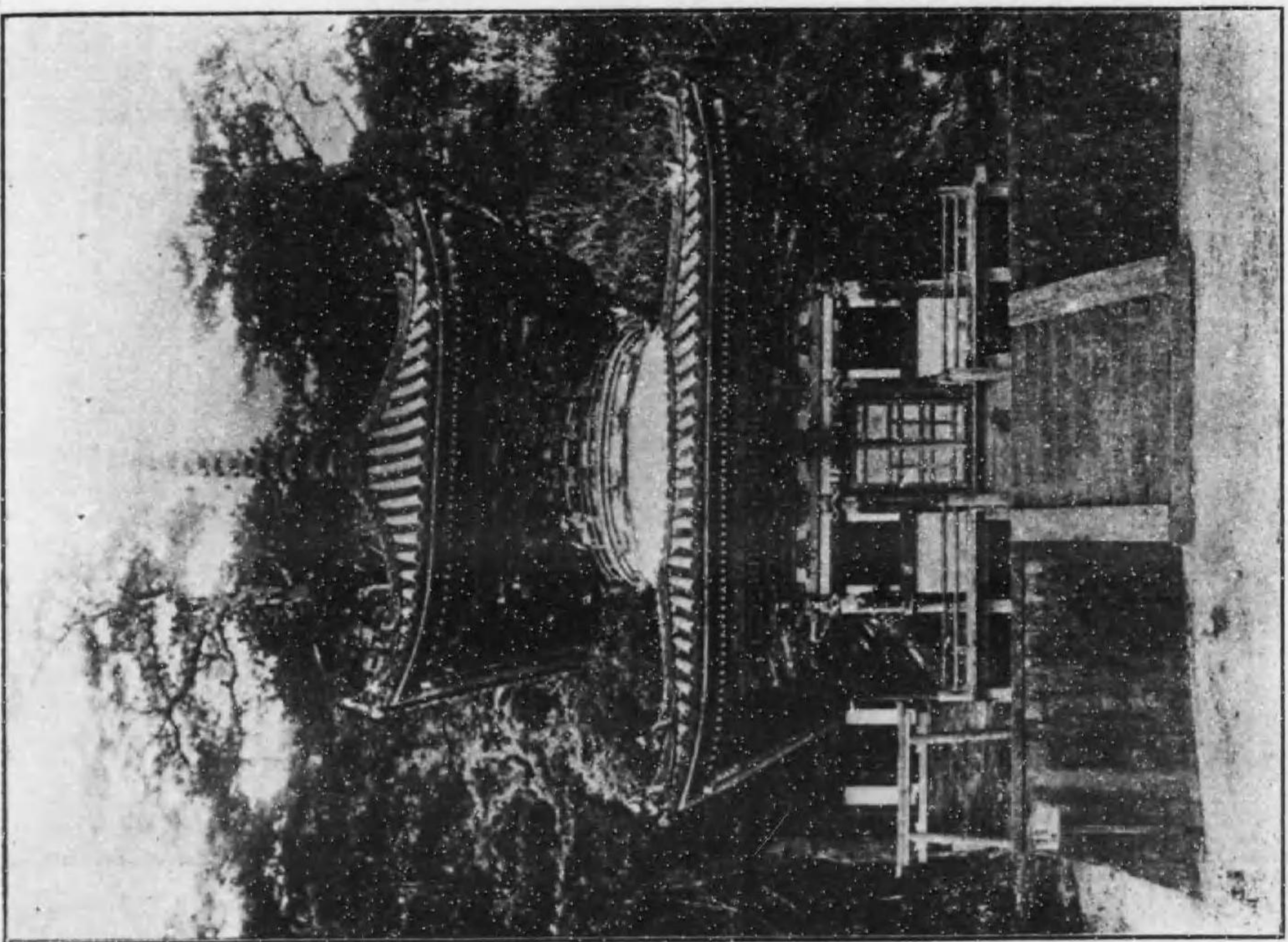


藏 寶 (山貴信和大)

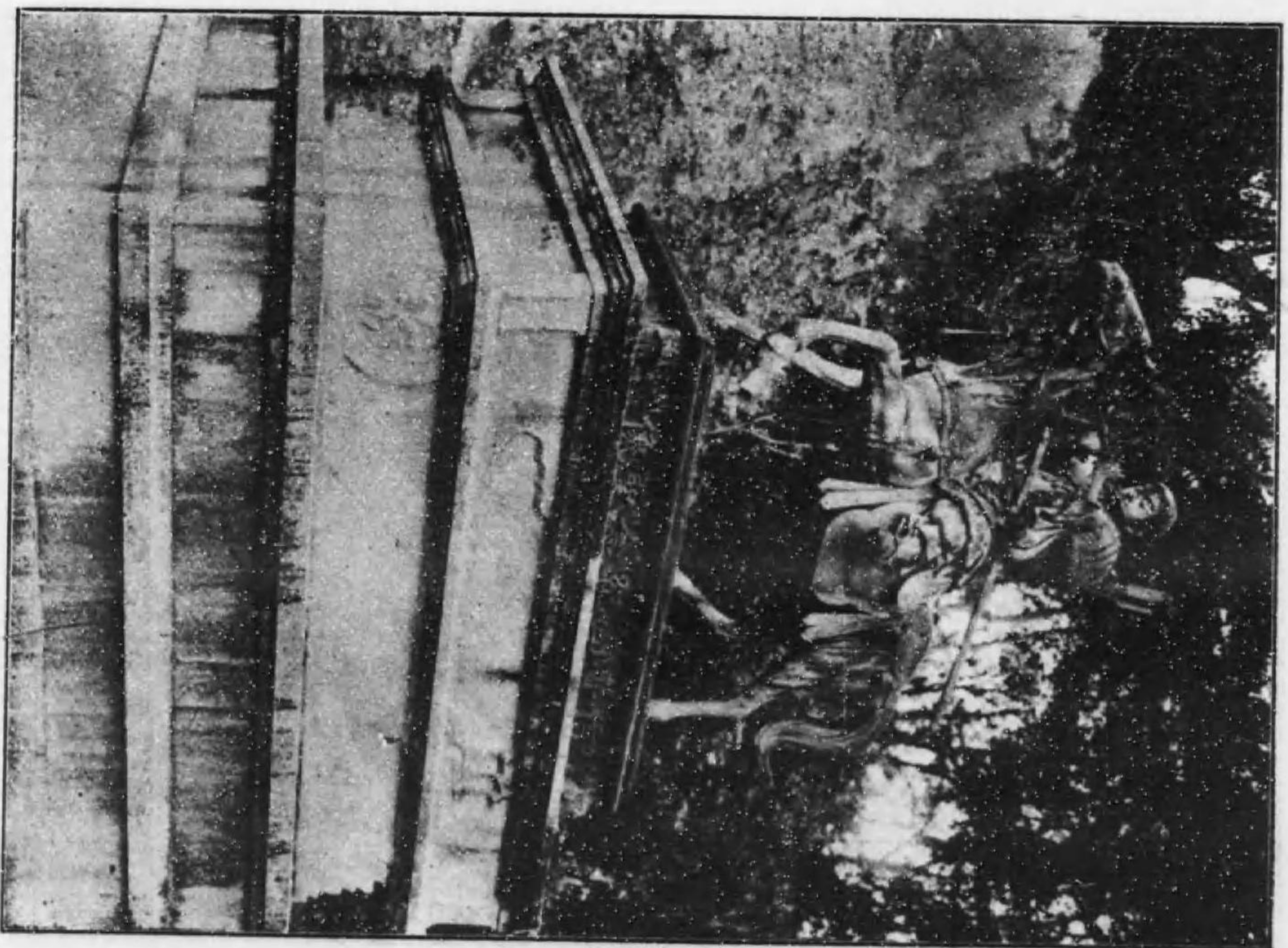


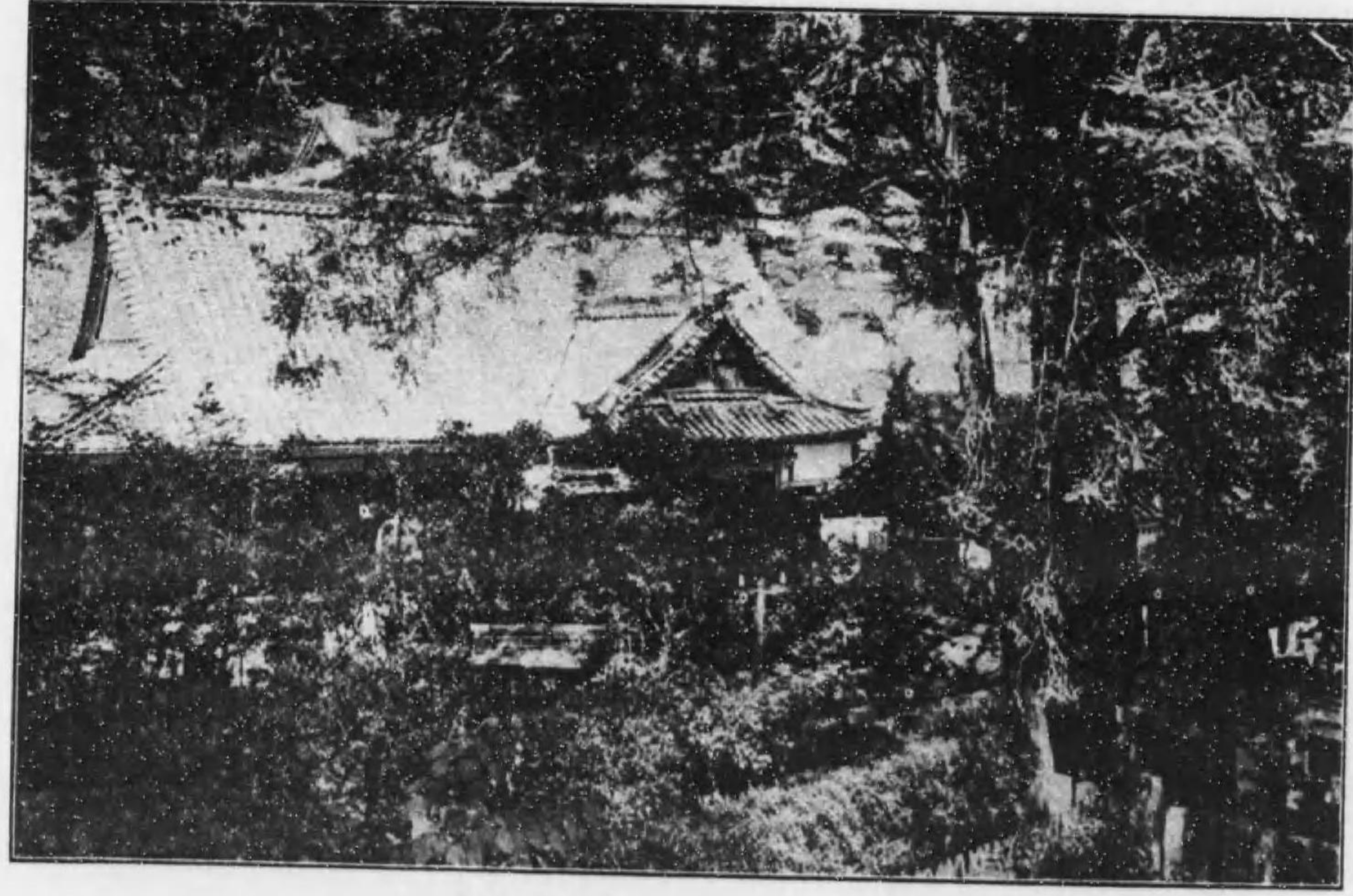
堂 山 開 (山貴信和大)

塔寶多(山貴信和大)

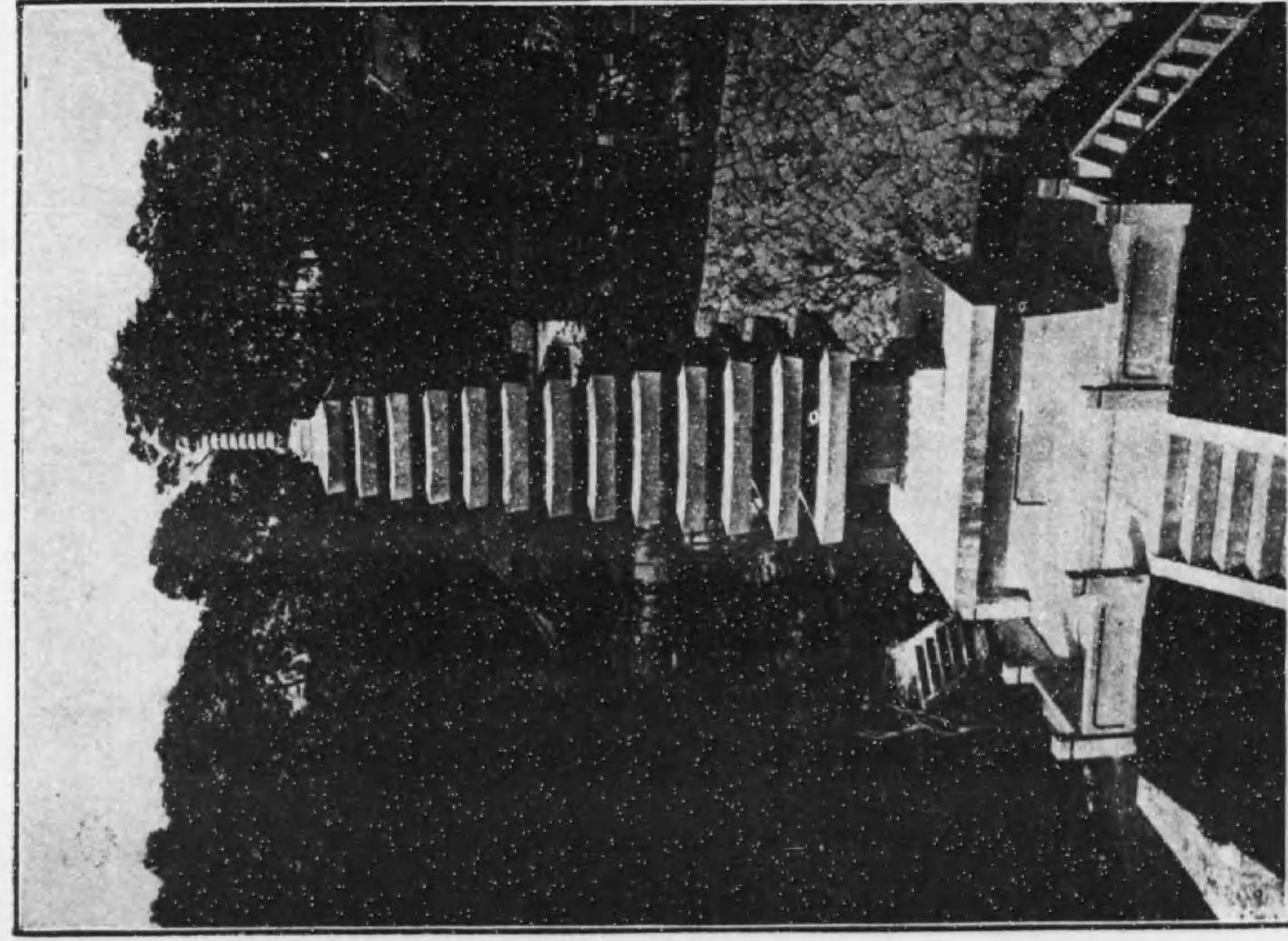


像銅子太德聖(山貴信和大)

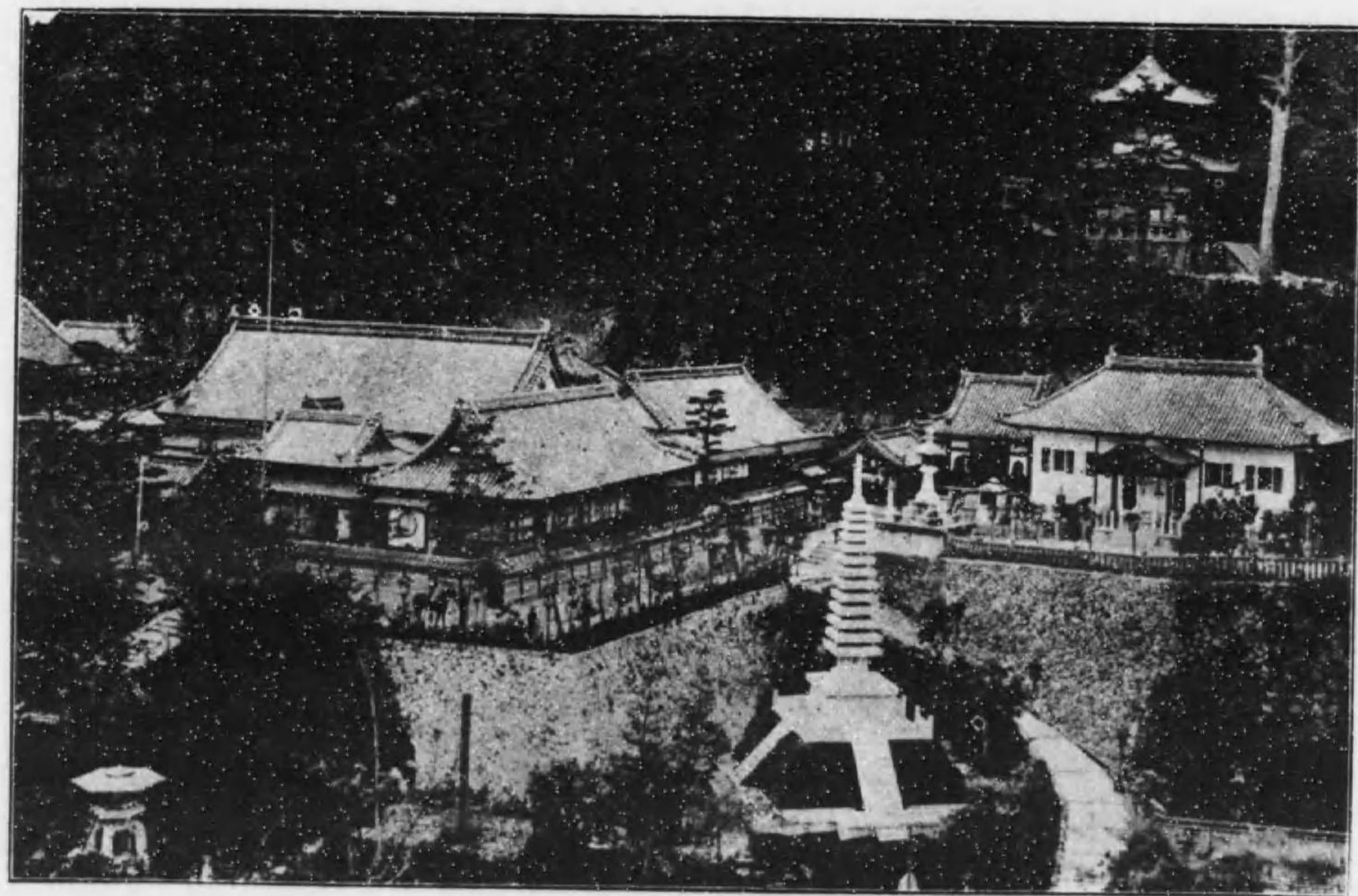




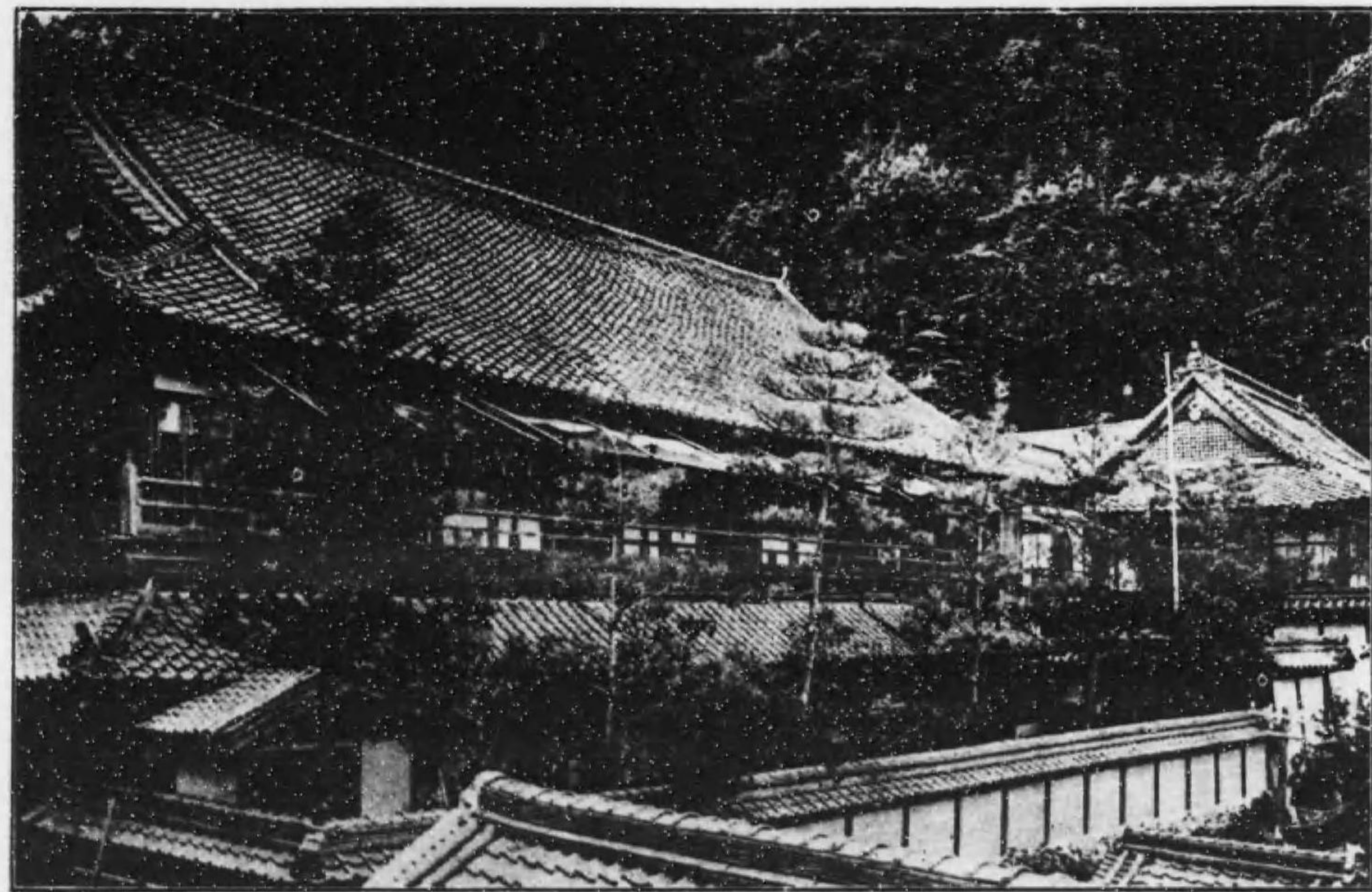
本坊寺務所 (大和信貴山)



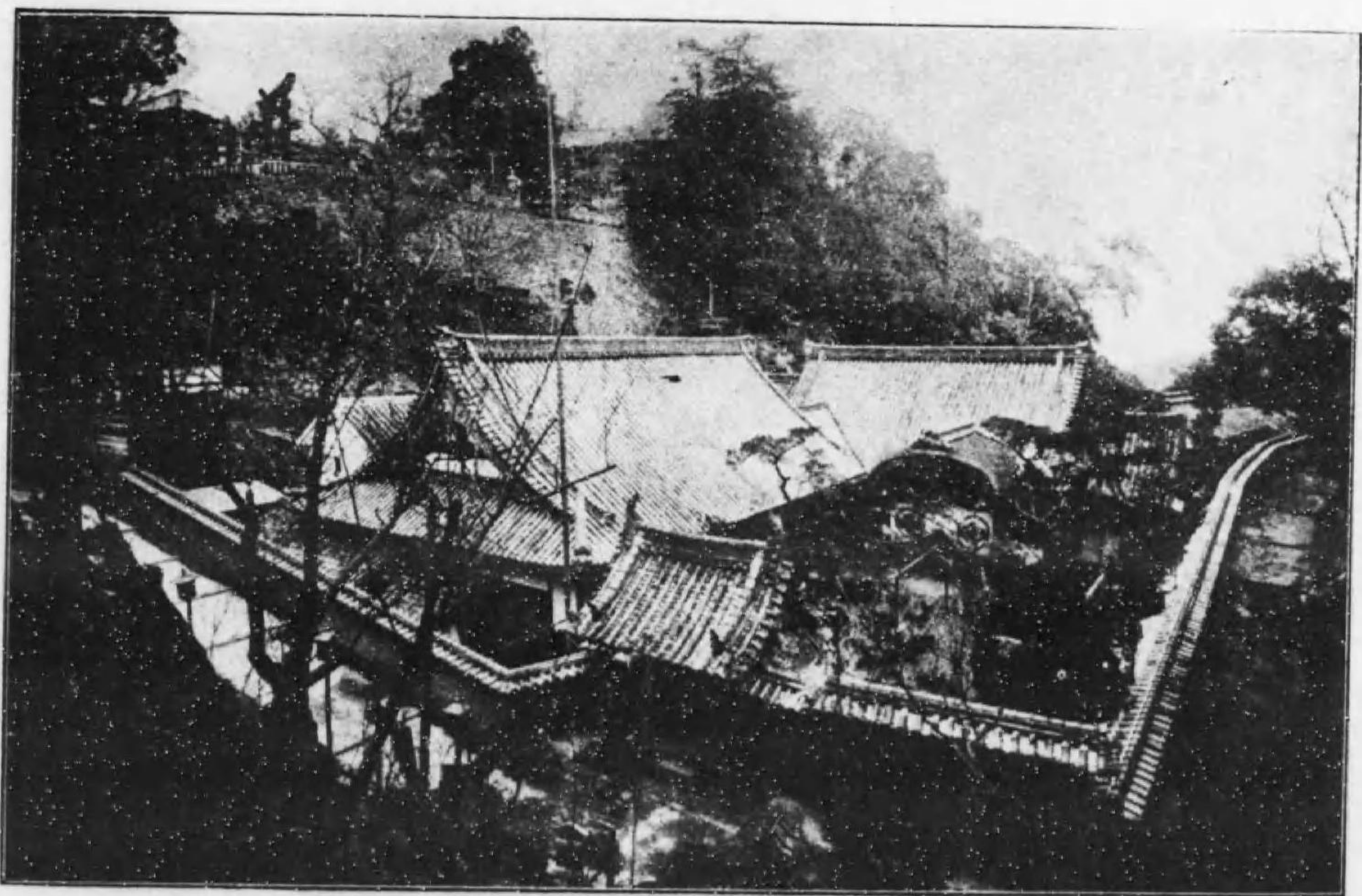
大和信貴山 (大和信貴山) 三十重石塔



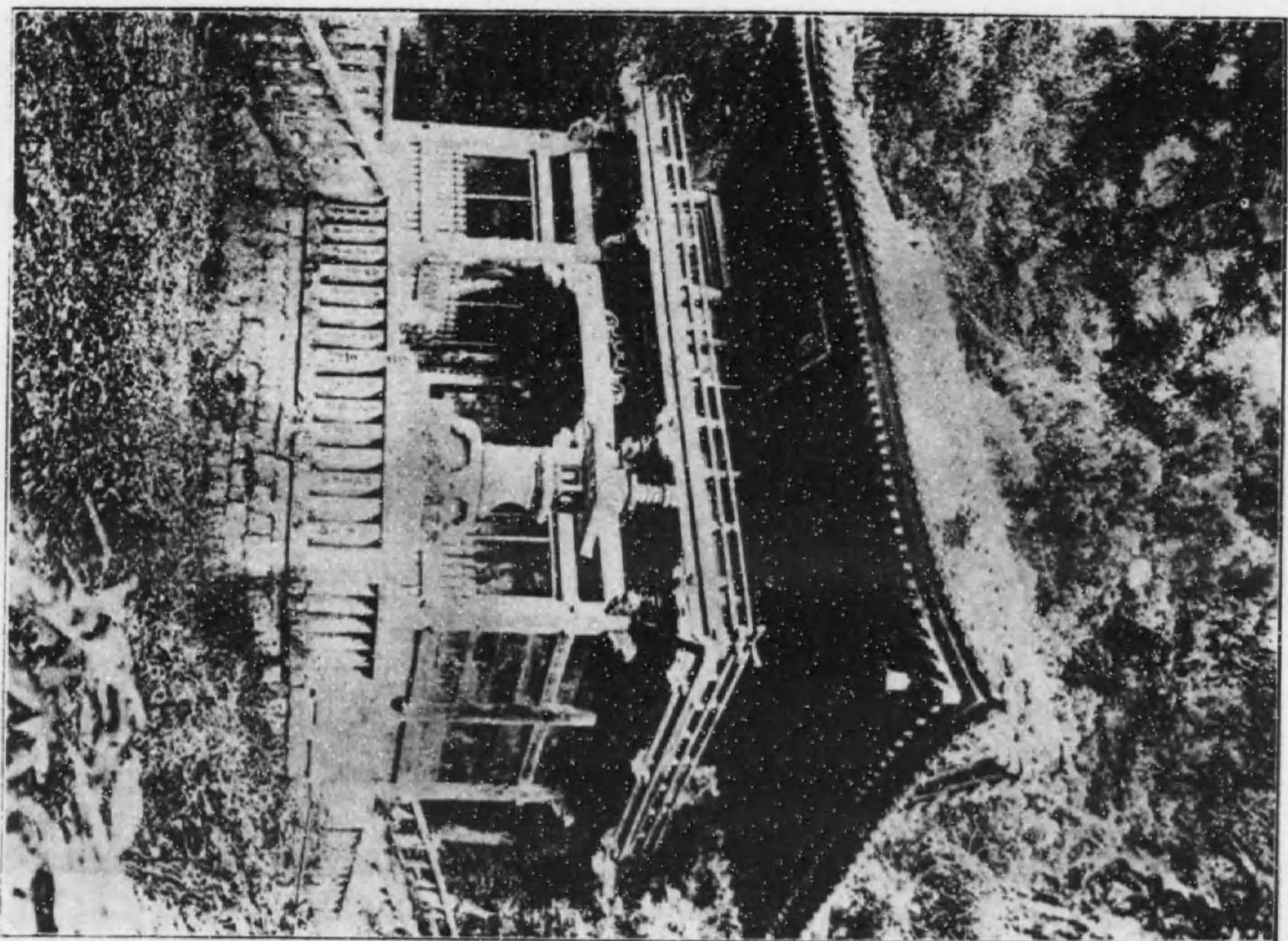
院 福 成 (山 貴 信 和 大)



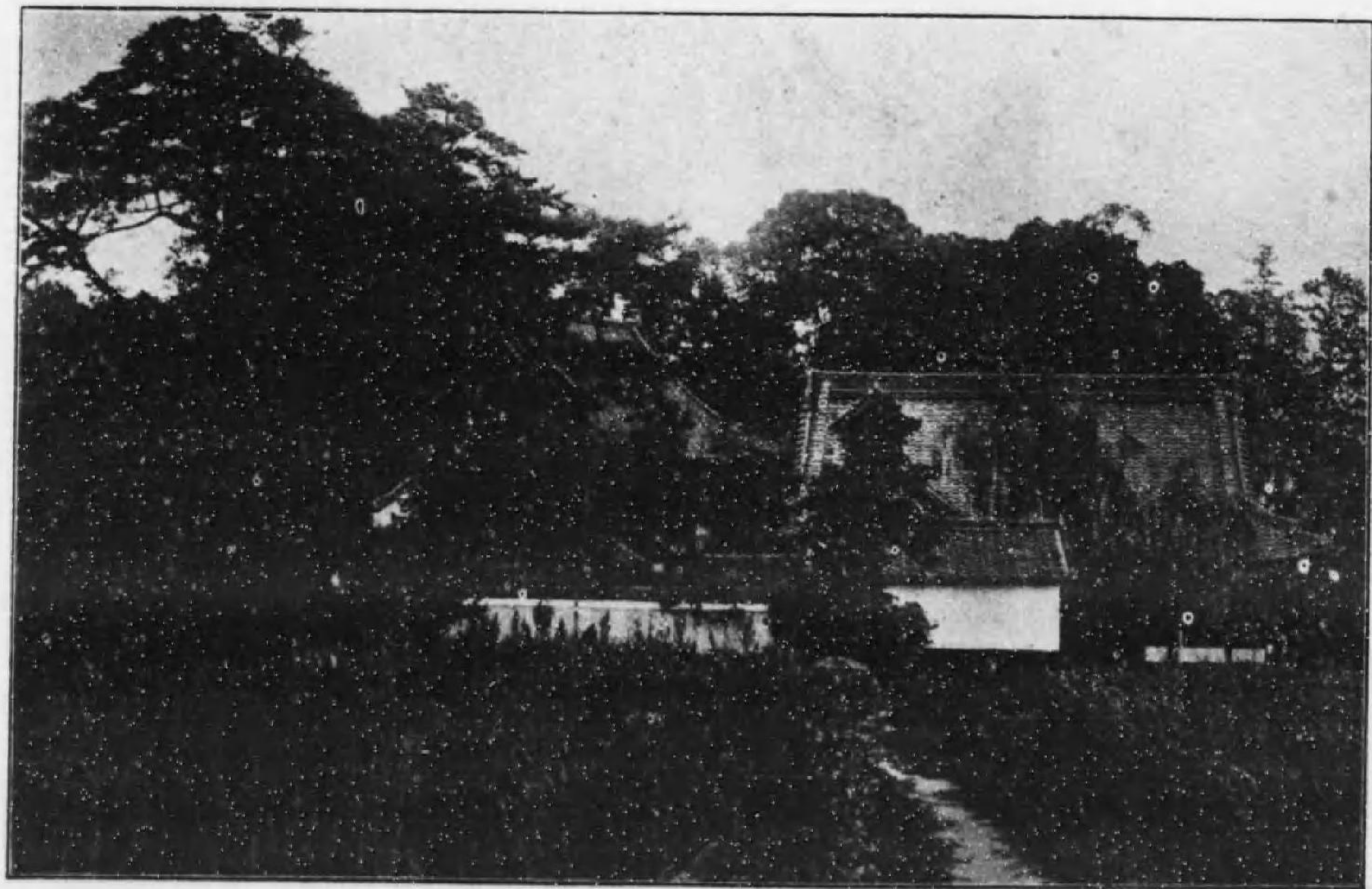
院 藏 玉 (山 貴 信 和 大)



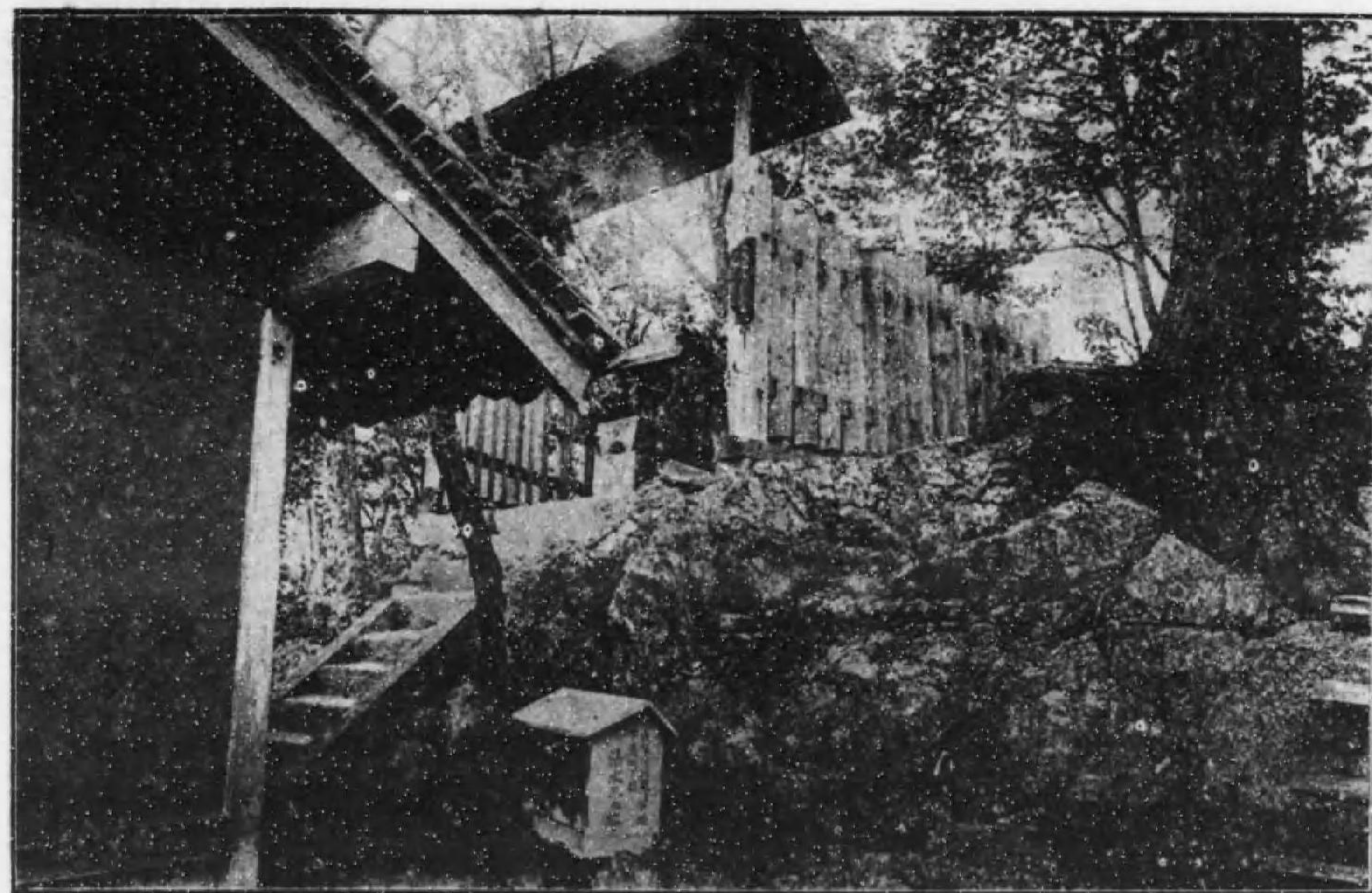
院手千 (山費信和大)



門王仁 (山費信和大)



院の奥山尾米 (山貴信和大)



法護鉢空 (山貴信和大)



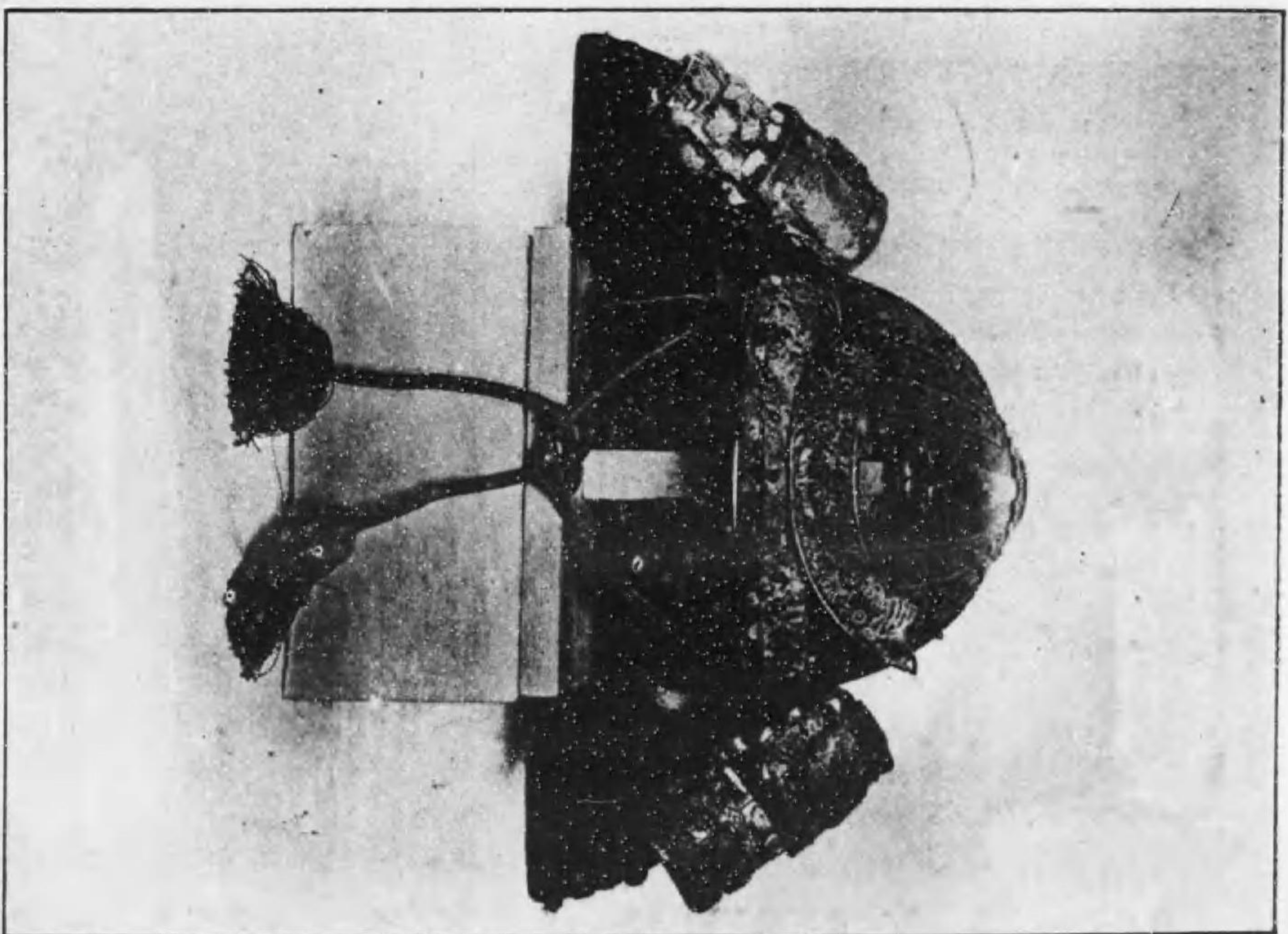
延喜加持卷



山崎長岩卷



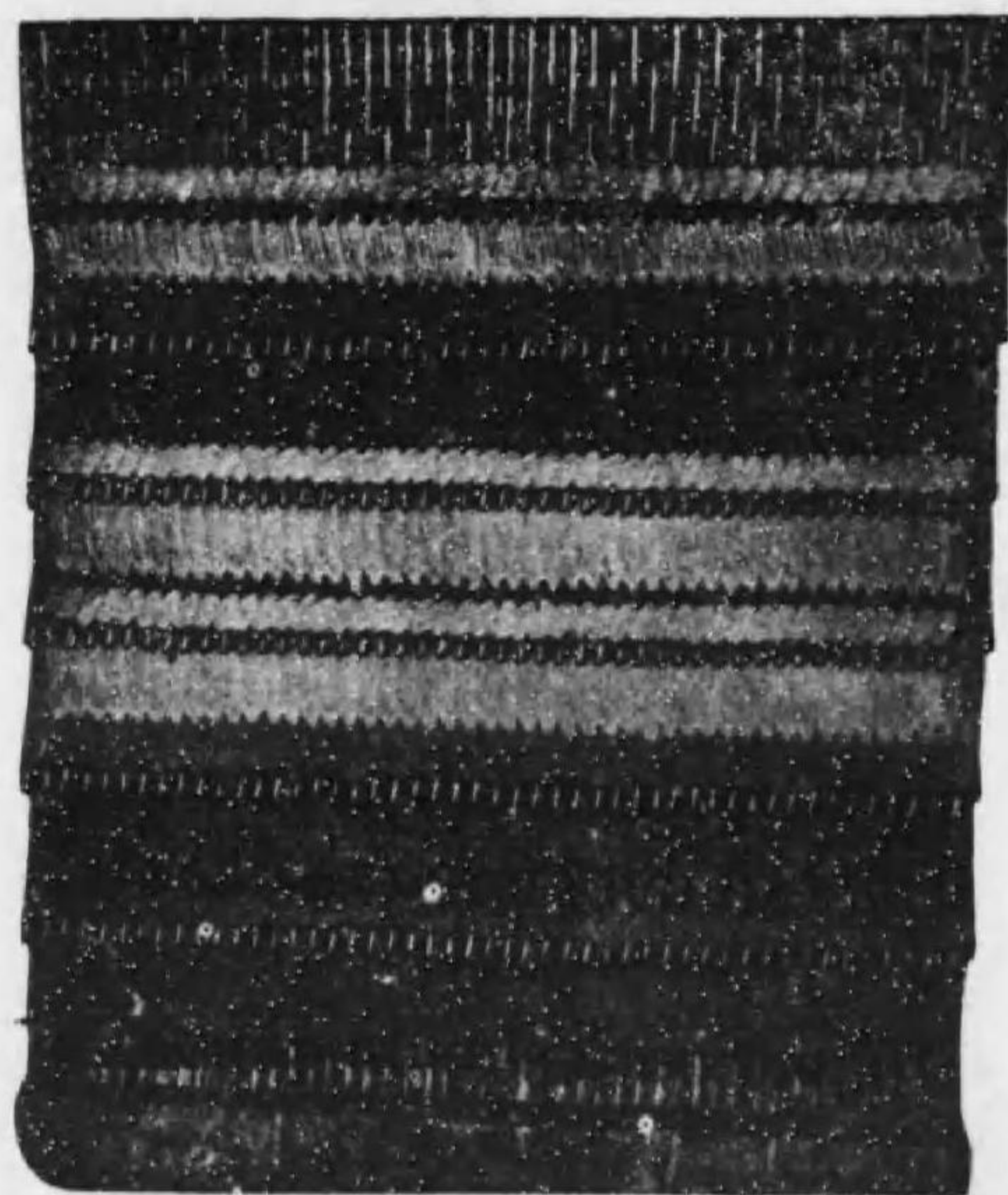
大和信貴山 尼公卷 繪寶國 物卷



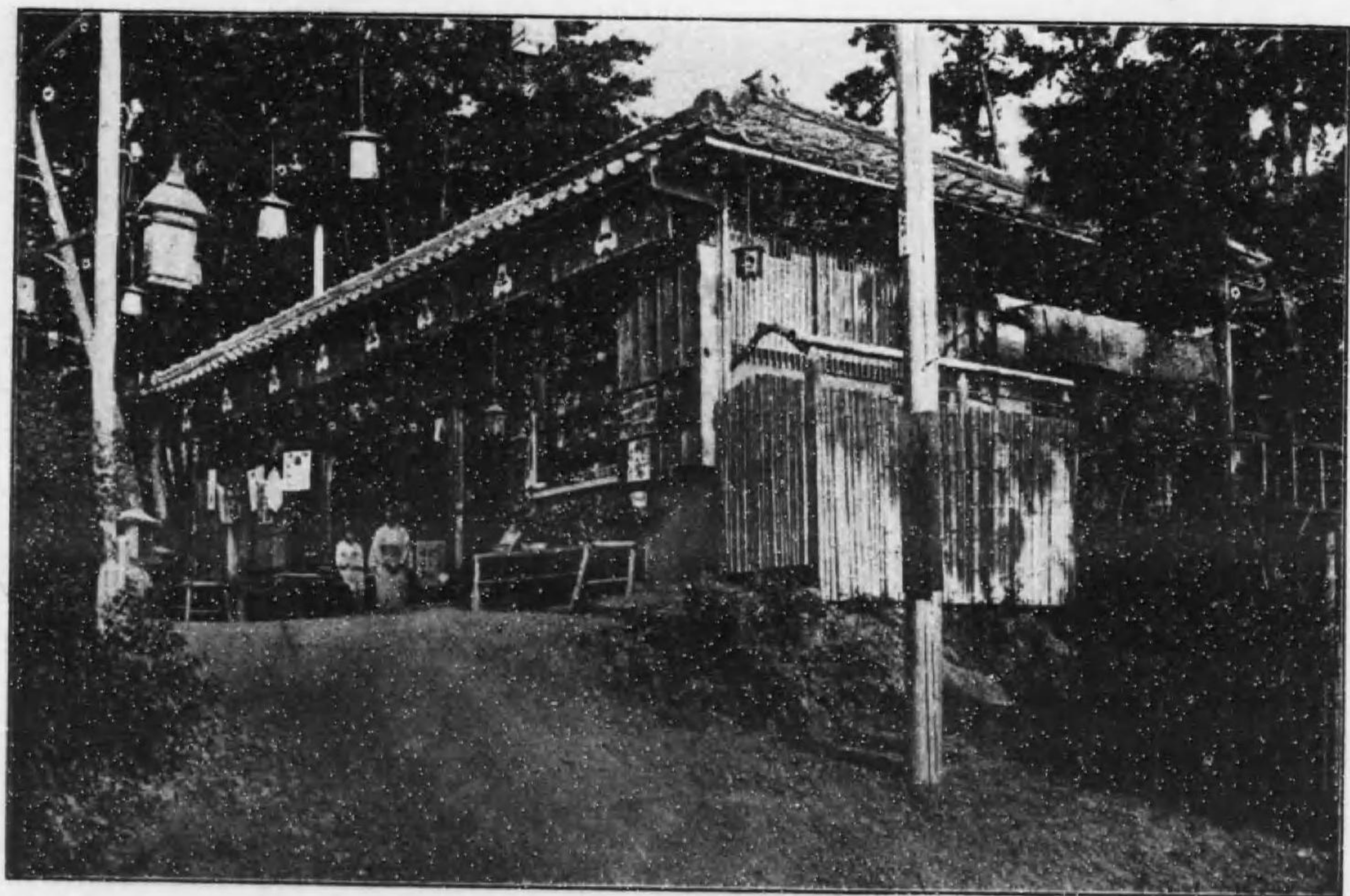
大和信貴山 (寶國兜正成公所用)



景の園庭院手千 (山貴信和大)



文證及袖鏡公楠 寶國 (山貴信和大)



鋪表庵樂一 (山費信和大)

信貴山縁起

大和國信貴山は本朝毘沙門天王景初出現の靈刹にして今を距る千參百有餘年の昔、聖德太子十六歳の御時、河内國稻村の城に向ひ玉ひ守屋大連を御誅罰の際即ち、人皇三十二代用明天皇の御宇、二年七月三日御馬上蘇莫者の曲を奏しつゝ、此山に臨幸し玉ひしに、鈿鏡護法遙かに仙音の嚮曉たるを聞き喜び迎へて、太子の御前に舞踏し玉ひぬ、時に生身の毘沙門天王忿怒の御姿にて巖上に出現し玉ひ、勝軍秘法并びに六ツ目の鎧箭を授け玉ふ、太子恭敬禮拜誓つて曰く、今我をして敵に勝たしめ玉へば當に寺塔を建立し、天王を安置し奉るべしと誓ひ玉ひ、直ちに利箭を携さへ軍を進め玉ふ、城中大樹あり守屋其樹に上り箭を發つて太子の御鏡に中つ、太子舍人跡見に命じ四天王の箭を放たしむるに禪定の弓、智惠の箭忽ち守屋の胸間を貫き遂に逆臣を滅し玉ひぬ世治まりて後、太子毘沙門天王に見へ玉ひし地に於て伽藍を創建し自ら天王の尊像を彫刻して本尊と崇められ眞に信すべし、貴むべしとて、信貴山と號し玉へり、爰に中興開山命蓮上人と云ふ博識の名僧あり、神護景雲の頃此山に上り、毘沙門天王寶前に於て、人法繁昌の祈誓を凝し、堂塔營構の大願を發し玉ふ、寶龜五年甲寅正月山中震動して、如意珠の岡の頂きに方八尺の石櫃を感得し玉ふ、其狀恰かも天壇の如し銘あり曰く、南無大慈大悲福田多聞天王宇賀宮天目一箇尊矣と、上人此石櫃の四周八十一坪を道場の基礎とし、善美を盡し本堂を造立し玉ふ、同十年の秋落慶供養修行時に上人四十有六歳なり、鈿鏡護法の教へを蒙むり、翌年正月よい五月に至りて六波羅密

行を修す、更に六月一日より三大法會を行じ、以て鎮護國家の秘法を凝らし玉へり、謂ゆる初三日は百味の飯食を供養し勤操和尚秘法を修するの庭には大辨財天影向を垂玉ひ、中日は眞惠和尚を請じて、舞樂行道藏王陀羅尼を誦じ、第七日御導師上表和尚伽阿三昧を修行し玉ふ、旛蓋瓢搖として微風動き、梵唄鬘院として樂聲に和す、曼荼の華は合掌に開き、妙香禪身に薫じて馥郁たり、是に於てか山神護法共に秘密の法味を嘗め、八大龍王ひとしく甘露の法水に浴し、天下泰平五穀豐饒を護らせ給ふ、當時坊舎六十六宇、住人五百餘、一山の旺盛人法の繁昌偏に上人高德の然らしむる所なり、其頃城州山崎の郷に一人の貧者あり過去業因の拙きを歎き上人の許に來り福を得るの法を問ふ、上人告玉はく、汝福を得んご欲せば常に慈悲心に住し、乞丐兒に食を施し深く毘沙門天を信せよと、貧者家に歸り朝夕天王を念じ奉る、上人即ち空鉢護法を遣はして日々食を乞はしむ、未だ幾年ならざるに大福長者となる、金銀米穀七倉に充滿せり、然るに古へより富貴にして憐らざるものは稀なり、憐れなるかな、山崎長者も遂に橋奢に流れ且つ慳畜の心生じければ、忽ち天玉の冥罰を蒙り、空鉢護法一の鉢を投玉へば、奇なるかな七つの倉、鉢に乘じて信貴山に飛來れり、長者驚ろきて急ぎ信貴山に詣で種々に懺悔せしかば上人曰く、縦ひ福を得るも橋奢の心を生じ、慳貪放逸ならば多聞吉祥の福も、春日の雪の如く忽ち消失せて終に家を滅ぼすに至るべし汝永く福を得んと欲せば上を敬ひ下を憐み、父母師長に孝養を盡し、深く天王を供養せよと諭して家に還し後空鉢に一俵の米を載て飛ばし玉へば數百の俵雁の飛ぶが如くに山崎に飛歸りぬ、其の倉信貴山に止

まりたる跡あり、號て七倉と云ふ、延喜二年醍醐大皇御病に惱ませ玉ひ畏くも上人御加持の勅命を奉じ、丹誠を凝して御祈念す時に御歳百七十有餘、上人の加持感應空しからず天皇の御惱忽ち癒させ玉ひしに依り、歡感の餘り四至の境内を定めさせ給ひ、東は立田川を限り、南は片岡山を限り、西は河内國を限り、北は獅子が岩屋を限り外に齋田二千八百町歩、坊舎一百餘宇を賜はり、尋で朝廟安穩守護國土子孫長久の御祈願所として「朝護孫子寺」の勅號を下し賜ひしより以來、朝護孫子寺と稱す、爾來歴代の天皇及び後醍醐天皇第三の皇子大塔宮深く御歸依あらせられ殊に後醍醐天皇御震筆朝護孫子寺の扁額を賜ひ今尚ほ現存す、大治元年丙午三月十九日覺鑲上人當山に攀り、無上の菩提心を發して祈誓を凝し玉ふに光明輝き妙香薫する處、毘沙門天王形を現して甚深の法談を垂玉ふ、時に上人講式五章を制して讚嘆し奉る、天王歡喜して曰く、段々玉を登き文々金を投ぐご、是に於てか萬德圓滿の寶珠を授け玉へり、抑も此の寶珠は八歳の龍女靈山會場に詣で報恩謝徳の爲釋尊に獻じ奉る時に周の穆王遠く靈山に詣し法華を聽聞す佛其の志を感じ彼王に授け玉ふ周の衰ふる時、龍女雷電に化して王宮に入り彼の寶珠を奪ひ去りて本朝嚴島明神（嚴島明神は龍女事妹なり）に授け、嚴島客人の宮は多聞天王なれば之を傳へて上人に授け玉ふ、若し一たび手に觸るものは七珍萬寶家に滿ち信心堅固のものは福徳榮華累代に及ぶと天王明に告玉ふ、蓋し上人根來寺を創建し眞言新義一派の盛なる皆以て毘沙門天王冥護の力如意寶珠の威徳なるものか、茲にまた智仁勇の三徳を備へ古今無雙の忠臣たる楠判官正成公は其先は敏達天皇五世の孫、井手

の左大臣、正一位橘諸兄公、父は十四代の孫楠兵衛正玄なり
 正玄四十を過て子なし母君常に之を憂ひ日夜當山に參詣祈願
 す信念遂に空しからず一夜夢に毘沙門天王所持の如意寶棒を
 吞と見て一子を誕生す名けて多聞丸（多聞は毘沙門の別稱な
 り）と云ふ後ち同公の遺言に因り軍之卷三畧卷、菊水の帳、
 最後の章皆當山に寄贈せられ今尙寶物中に存在す、正親町天
 皇の御宇元龜天皇の頃松永久秀當山に信貴城（當寺本堂を距
 る西方の山嶺）を構ありし時は伽藍諸堂及び坊舎六十六宇
 の修理を加へ且地領三千石を寄せられたり、天正五年久秀終
 りに信長に叛し其滅するに及んで壯麗なる伽藍坊舎概ね兵燹に
 罹り灰燼に歸す慶長七年豊臣秀頼公の祈願所として本堂及び
 諸堂を再建せられ漸く舊觀に復するを得たり（奉行片桐且元
 自筆棟札今尙存す）爾來徳川三代將軍の御歸依特に厚く山林
 二十三町餘歩を寄せ給ひ五代將軍御臺所 桂昌院殿には地領
 若干を寄せられ、寛政五年有柄川親王殿下の御祈願所に補せ
 られたり爾來長日の吠天秘法并に護摩供を修し金輪聖皇、寶
 祚長遠天下泰平五穀成就の祈禱常に怠ることなし星移り物換
 り明治維新の變遷に際し地領盡く上地を命せられ稍衰頽に歸
 せしも多數信徒の歸依厚く殊に護法熱心の諸僧輩出し漸く法
 燈を維持するを得たり由來當山は無本寺にして一山獨立なり
 しが明治六年二月太政官の御布達に隨ひ高野山に屬す明治三
 十五年十一月特に舊領山林五十餘町歩の拂下を得て寺門の維
 持滋固く法燈 彌輝きぬ

明治四十二年巳酉十月保勝會を設け本堂改修の工を起し大
 正三年甲寅八月竣成を告げ頗る輪奐の美を添ふ嗚呼天壤無窮
 の寶祚に伴ひ普く無盡の福德を施し給ふ天王の弘誓信に貴む
 べきなり

國寶繪卷

信貴山古縁起三卷は有名なる鳥羽僧正の畫、藤原行成卿の詞
 書にして國寶中の最大逸品なり、山崎長者の卷、延喜加持の
 卷、尼公の卷の三卷に別ち筆力雄健古畫蒼然一見其の妙技に
 驚嘆せざるはなし

（信貴山略縁起及び寫眞參照）

當山恒規法會

- 一 修正會 本尊開扉 一月一、二、三日間 午前三時 午後五時
- 一 大會式 同 一月十五日 午後一時
- 一 御縁日 毎月一日三日十五日 每寅の日
- 一 保勝會法會 春秋二期修行
- 一 常樂會 二月十五日
- 一 正御影供 三月二十一日
- 一 誕生會 四月八日
- 一 大縁日 本尊開扉 七月三日 午後一時
- 一 施餓鬼會 七月十二日
- 一 大々法會 本尊開扉 十一月二十二日 午後一時
- 一 新嘗會式 同 十一月二十三日 午後一時
- 一 御法樂 十二月三十一日 午後五時

境内現在寺院

- 一 朝護孫子寺 （本坊、寺務所）
- 一 玉藏院 （宿坊）

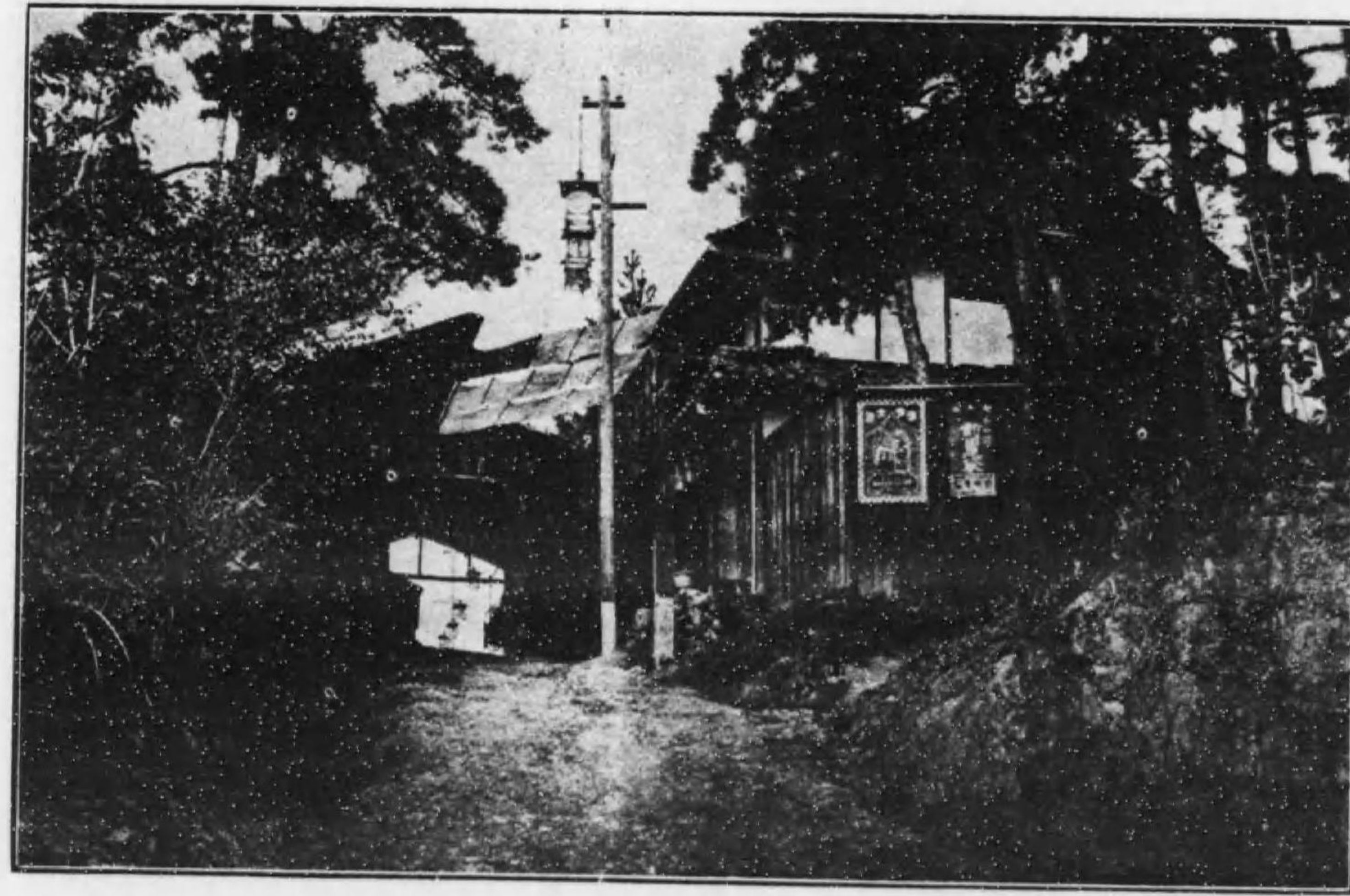
一成 福院 (宿坊)
一千 手院 (宿坊)

宿坊は一般参詣人の爲めに隨意宿泊又は渾ての賄ひを供給する便宜あり

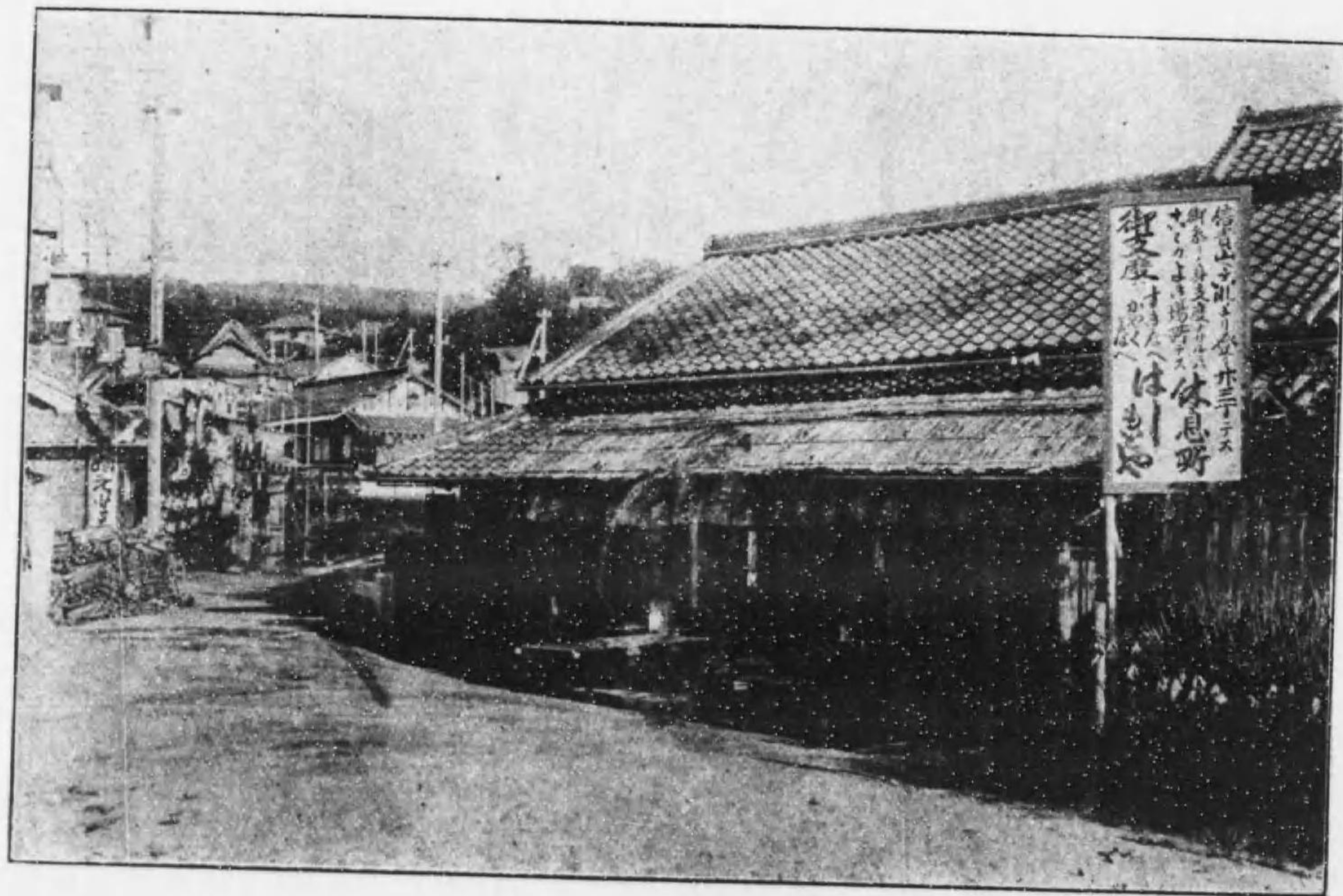
米尾山多聞院縁起

夫當寺は古へ信貴山の塔頭なりといへども今は別院にして奥院と稱す即ち聖德太子の御開基本尊毘沙門天王同じく太子の御作なり昔聖德太子守屋退治の御とき多聞天王坂合部大臣と化現し進んで先鋒を揮ひ茲に佛敵を亡し官軍凱歌を擧げ天王は即ち此の峯の雲に隠れ給ふ太子欽喜の餘り此處に伽藍を建て天王の像を安置し給ひ多聞院と號す此山に米尾粗尾尾尾とて三つの峯あり是三辨寶珠を表す中にも當山には不思議の燒米あり傳へ云ふ毘沙門天王福德無量にして寶米を積事山のこそし是を萬民に施與とおほすといへども一切衆生慳貪瞋恚邪見の業火熾盛にして寶米自然に焚焦す此義を衆生に見せしめんがために當山に此燒米有て諸人は是を拾へども更に盡るとなし此ゆへに米尾山といふ若し信心堅固にして仁慈を行ひ天王に歸依し此米を頂戴する輩は疫癘邪思の病患を除き瘡疾立どころに癒へしかのみならず天王威神の力をのづから業火を消滅し福壽増長して實の寶米を得んは又疑ふべからず

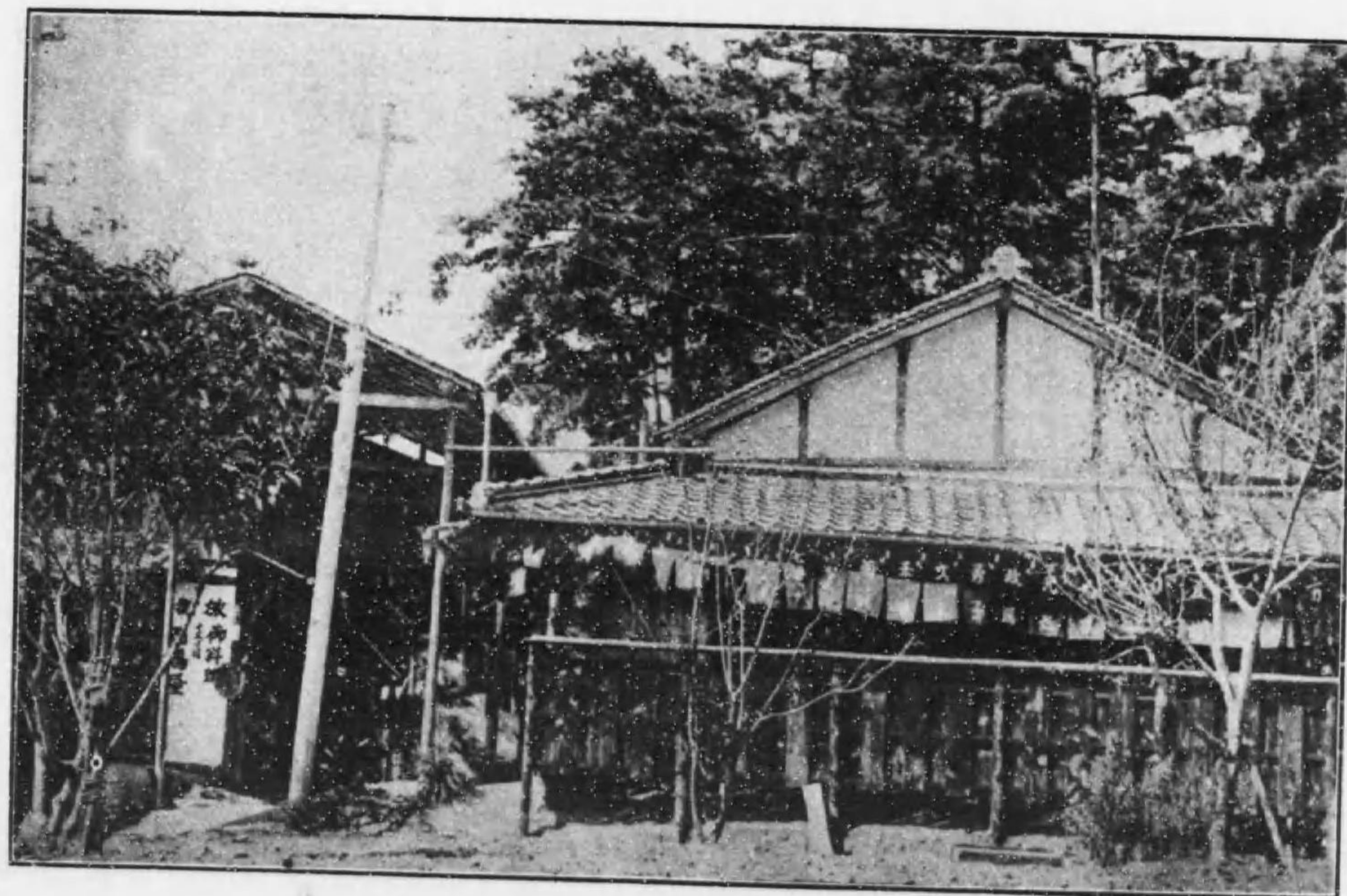
一樂庵は信貴山東麓参詣道の中央に在り位地高燥にして周圍の眺望頗る絶景明治四十四年春五月伏見文秀宮殿下御登山遊ばされ當庵に於て御休憩の光榮を給ふ蕭洒たる一室天然の裏庭は深遠にして幽邃なり花季は鶯杜鵑と遊び月の夕雪の朝は風流雅容の好み楽しむ茶席なり



屋茶本柿目丁十道東 (山貴信和大)



屋茶本橋麓道東 (山貴信和大)



屋茶嶋岡目丁五十道東 (山貴信和大)

大正三年九月三十日印刷
大正三年十月五日發行

奈良縣添上郡佐保村法蓮七十一番地

著作者 廣岡清一

大阪市東區備後町四丁目甲五番地

印刷者 栗本小市

大阪市東區備後町四丁目甲五番地

印刷所 栗本繪端書店

電話本局二九一七番
振替大阪八八六番

不許
複製

發行所 朝護孫子寺

奈良縣生駒郡平群村大字信貴畑
二千二百八十一番地

電話龍田十一番



終

